

〔研究ノート〕

# フィレンツェのボーポリ庭園

松 本 典 昭

## はじめに

1982年に「フィレンツェ歴史地区」、2013年に「メディチ家の別荘と庭園」がユネスコ世界遺産に登録された。その両方に含まれる唯一の場所がフィレンツェ南端に位置するボーポリ庭園である(図1ab)。

ボーポリ庭園の面積はベルヴェデーレ要塞(サン・ジョルジョ要塞)から西南のロマーナ門まで伸びる大三角形40ヘクタール。第三市壁内の都市面積が630ヘクタールだから旧市街のおよそ15分の1を占める広さである。16世紀はニコロ・トリニボロの設計した南北軸の形成、17世紀はジュリオ・パリージの設計した東西軸の拡張の時代である。本稿ではボーポリ庭園の生成過程を時間軸と空間軸にそって素描することにしたい。

なお本文中の作品番号(n.)は図1bの彫刻配置図の番号に対応している。出典のない写真はすべて2017年に筆者が撮影したものである。

## I メディチ家以前

ローマ植民市フロレンティアは前1世紀、アルノ川北岸(右岸)に建設された。そのため南岸(左岸)は「オルトラルノ(アルノ川の向こう側)」と呼ばれて現在にいたるが、ボーポリ庭園はそのオルトラルノに位置する。2世紀のハドリアヌス帝時代に新カッシア街道の建設とむすびついて経済発展し、都市に食肉を供給するための牛舎「ブビリア(bubilia)」があった。一説では、これがボーポリの語源である。だがもっと有力な一説によれば、6世紀にランゴバルド族がフィレンツェを支配したときの領主ボビロ

(Bobiro)またはボルゴロ(Borgolo)(ボルゴリ(Borgoli), ボルゴリーニ(Borgolini)などと語尾変化)の家名に語源があるという。

確かなことは、1172年の記録にも1249年の記録にも「ボゴレ(Bogole)」の地名が見えることで、その複数形が「ボゴリ(Bogoli)」である。13世紀の急激な経済発展と人口増加によりオルトラルノが繁栄し、旧来のヴェッキオ橋のほかにカッライア橋(1220年)、グラツィエ橋(1237年)、サンタ・トリニタ橋(1252年)が一気に架橋され、最後に1333年に完成した第三市壁がオルトラルノを市内に取り込んだ。当時、都市を見下ろす小高いの丘の所有者はマンネッリ家やパニエージ家、オリヴェート会修道院やベネディクト会修道院などだった。

1341年、野心的な商人チョーネ・ディ・ブオナッコルソ・ピッティがオルトラルノに3軒の家つき土地を購入し、その後、ルカ・ディ・ブオナッコルソ・ピッティが土地を拡張して「ボゴリ」の丘の斜面に新しい邸宅を建てることにした。起工の年は1440年から1458年まで幅があり、よくわからない。ヴァザーリは設計者をブルネッレスキとしているが、やはり同時代の記録がない。施工者はブルネッレスキの弟子ルカ・ファンチェッリとされているので、ブルネッレスキが関与したとしても不自然ではない。ルカ・ピッティは竣工前から邸宅に住み始めたが、1472年の死去時に邸宅は未完成部分を残していた。1469年のカタストには、ルカ・ピッティの地所について「背後に庭のある新築の家」とだけ記されている。だが1470年の《鎖の地図》(図2)を見ると、アルノ川と第三市壁のあいだにそびえる三階建七径間という群を抜いた大豪邸の規模が十分に伝わってくる。



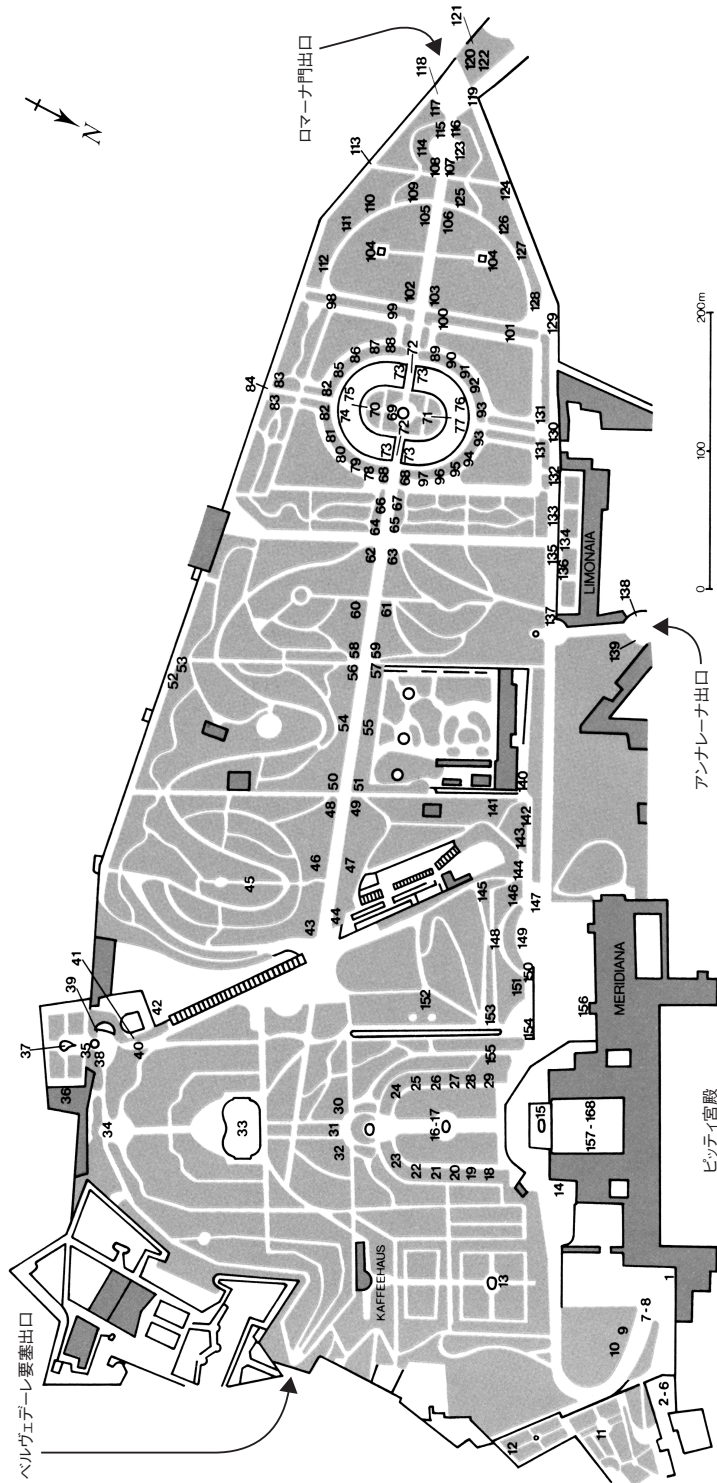


図 1b ボーポリ庭園彫刻配置図

出典) Caterina Caneva, *IL Giardino di Boboli*, Firenze, 1982, p. 32 より筆者加筆作成



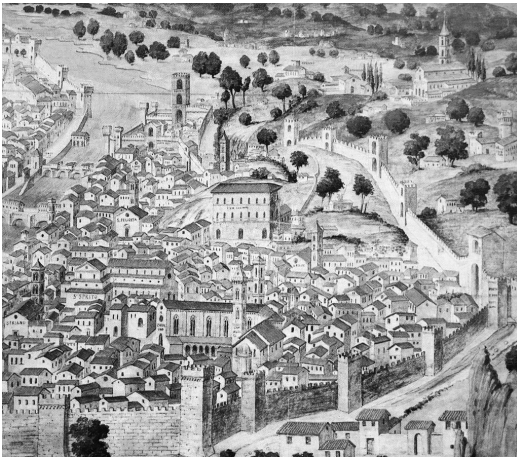


図2 1470年の《鎖の地図》(部分)

出典) *Ibid.*, p. 3.

## II メディチ家前期3代トスカーナ大公の時代

コジモ1世(在位:1537-74年)の妃エレオノーラ・ディ・トレドが1549年、ピッティ邸と背後の土地を9000スクードで購入した。2人のあいだにはすでにマリア、フランチェスコ、イザベッラ、ジョヴァンニ、ルクレツィア、ガルツィアの6人の子があったが、同年、フェルディナンドが生まれて薄暗いパラッツォ・ヴェッキオ(当時は公爵宮殿と呼ばれていた)が窮屈になっていた。

エレオノーラが購入した動機には、数年前までナポリ副王の父と暮らしていたナポリの庭園に比肩しうる庭園をつくりたいという願望も含まれていたはずである。当時フィレンツェ最大の邸宅のみならず、背後の空き地の存在が市民的現実から遊離した貴族的優雅さの追求にかなっていた。青空のもとで気晴らしをする快適な理想の空間が広がっていたのだ。同じ1549年、コジモ1世はニコロ・トリーボロ(1500-50年)に庭園設計を依頼した。造園作業は1550年以降ダヴィデ・フォルティーニ(1590年没)、1554年以降ジョルジョ・ヴァザーリ(1511-74年)、1560年以降バルトロメオ・アンマナーティ

(1511-92年)、1574年以降ベルナルド・ブオンタレンティ(1531-1608年)と引き継がれていく。

エレオノーラがとりわけ心をくだいたのは庭園の拡大と整備だった。1550年にサンタ・フェリチタ女子修道院から一区画、1551年にグイディ・ディ・モンテリゴリから別の一区画と次々に土地を購入していった。コジモ1世時代の樹木は現在より多様性に富み、モミ、イトスギ、マツなどの針葉樹、カエデ、コバノシナノキ、クルミ、ニレ、トルコオーク、ブナ、プラタナス、ミズキなどの落葉性の広葉樹、トキワガシ、ゲッケイジュ、モクセイ、クロウメモドキなどの常緑樹、それに加えて鳥網を仕掛けるセイヨウヤマモモ、ビャクシン、セイヨウミズキ、モクセイ、イボタノキなどがあつた。食卓に供する果樹も各種の柑橘類を筆頭にサクランボ、モモ、プラム、アーモンド、イチジク、ブドウなどがあつた。珍花希葉と奇果異草の数々がイタリア各地やアメリカ大陸やインドからもたらされ、それらは幾何学的に分割された菜園で栽培された。

ボーポリ庭園に現存する最古のグロッタ(人工洞窟)は、エレオノーラの依頼で1553年から55年に制作された「グロッティチーナ・ディ・マダマ(奥方の小洞窟)」(n. 12)である(図3)。これは「ブオンタレンティのグロッタ」通称「グロッタ・グランデ(大洞窟)」と区別するために「グロッティチーナ(小洞窟)」と呼ばれる。被造者が創造主を模倣して、「自然の自然(natura naturalis)」ならぬ「人工の自然(natura artificialis)」を再創造する、ローマ起源の野趣あふれる建築空間である。ヴァザーリによれば、エレオノーラは「ピッティの庭園に、氷柱のような酒石と多孔質の石灰石トゥファでいっぱいグロッタをバッチョ[バンディネリ]に制作させた」。この「グロッティチーナ」は、トレッピーオやカステッロの別荘にも見られるマニエリスム趣味のものであり、設計者としてトリーボロ、バンディネリ(1488-1560年)、ブオンタレンティなどの名があげられているが確





図3 「グロッチーナ・ディ・マダマ」

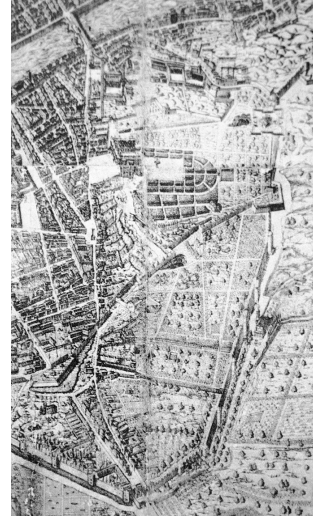


図4 1594年のブオンシニョーリの《フィレンツェ地図》(部分)

出典) *Ibid.*, p. 4.

証がない。トリボロの後継者ダヴィデ・フォルティーニが仕事を完成に導いた。バンディネッリの弟子ジョヴァンニ・ファンチェリ (?-1586年) が外部の大理石門やメディチ=トレド家の紋章、内部の《2頭の雌ヤギ、山羊の頭、2人のブット、楕円形の水槽》(1554年)をつくり、その水槽上中央にはエレオノーラが発注したバンディネッリ作《雌ヤギ》が1554年にオペラ・デル・ドゥオーモから移されて設置された。山羊はコジモ1世の支配、雌ヤギはエレオノーラの多産と繁栄を象徴している。

現在の野外劇場の場所には、すでに1553年に凹地の「草地」があり、1584年(1594年に版画印刷)のステファノ・ブオンシニョーリの《フィレンツェ地図》(図4)に描かれているように、トリボロがサン・ジョルジョ門外からわざわざ水を引いて最初の噴水を制作した。トリボロ没後の16世紀後半に宮殿から丘の斜面をのぼる南北方向の中心軸が形成された。軸線に沿ってモスカテッロ(マスカットの変種)、トキワガシ、ゲッケイジュが植えられ、ツグミなどの小禽類をとる鳥網が仕掛けられた。同時期、パッラコルダ(テニスに似たボール遊び)のた

めの「球技場」もつくられた(場所は宮殿南東の角だったが、17世紀初頭の拡張工事で撤去された)。ヴァザーリやアンマナーティも造園作業に関わり、養魚池やオレンジ棚をつくり、サフランやアスパラガスなど珍しい植物を植えた。

アンマナーティは1558年から70年、宮殿の第一次拡張工事で宮殿背後にコの字型の翼棟を増築して中庭をつくった建築家である。その中庭で1578年、フランチェスコ1世(在位:1574-87年)とビアンカ・カペッロの結婚祝典として馬上槍試合が催されたが、最大のスペクタクルはなんといっても1589年、フェルディナンド1世(在位:1588-1609年)とクリスティヌ・ド・ロレーヌの結婚祝典として催された「ナウマキア(模擬海戦)」(図5)である。中庭に水が張られ、多くのミニチュア船が海戦をくりひろげる大掛かりなものだった。

コジモ1世時代の忘れがたい彫刻群は、アンマナーティがつくった《ユノの噴水》(バルジェッロ国立博物館)(図6)である。コジモ1世が1555年、パラッツォ・ヴェッキオ五百人広

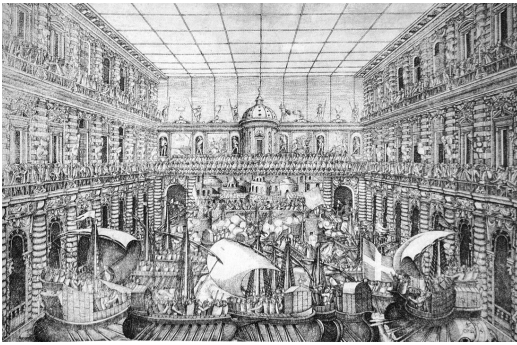


図5 オラツィオ・スカラベッリ「ナウマキア (模擬海戦)」

出典) Franco Cesati, *I Medici*, Firenze, 1999, p. 103.



図7 「モーセのグロッタ」



図6 アンマナーティ作《ユノの噴水》

間のために注文した噴水は、寓意的な人物像6体と動物像4体で構成された。だが噴水は五百人広間に置かれることなく、フランチェスコ1世がプラトリーノの別荘に一時(1585-88年)設置したあと、1588年にピッティ宮殿の中庭と庭園のあいだの仕切り壁(現、「モーセのグロッタ」)(図7)の上に移された。1635年に撤去され(「カルチオーフォの噴水」の完成は1642年)、1740年頃までカジーノ・ディ・サン・マルコに置かれた後、また解体されてボーポリ庭園に戻ってきた。1927年から1973年にかけて順次すべての彫刻はバルジェッロ国立博物館に移され、現在は博物館中庭にアーチ状の群像が復元されている。アンマナーティの彫刻群は、アー

チ上に「空気」を象徴する《ユノ》と両脇に《2羽の孔雀》。アーチの真下に「地」を象徴する《ケレス》。その両脇に「水」を象徴する老いた男性《アルノ川》およびライオンの《マルヅッコ》と若い女性《パルナツソスの泉》および有翼の《ペガソス》。アーチの両脇には「賢明」を象徴する《若者とイルカ》および「フィレンツェ」を象徴する《フローラ》という構成である。

アンマナーティの跡を継いだブオンタレンティが、フランチェスコ1世のためにつくった最大のもは、いわゆる「ブオンタレンティのグロッタ」別称「グロッタ・グランデ」(n. 2-6)である(図8)。古典的なポルティコ(円柱のある玄関口)はヴァザーリが1556年から60年に制作した。ポルティコの左側の彫刻はバンディネリ作《アポロ》、右側の彫刻はバンディネリ作《ケレス》であり、本来は大聖堂のためにつくられたが、1560年にこの場所に移された。次に1583年から93年にかけてブオンタレンティがグロッタを制作した。上部にメディチ家の紋章と大公冠があるファサードは、ジョヴァンニ・デル・タッタが「平和」と「正義」、コジモ1世のシンボルである「カプリコロノ」と「帆掛け亀」の装飾を担当した。このファサードはマニエリスムの相反する二つの特徴をよく表しており、下半分が安定した擬古典主義、上半分がグロテスクな反古典主義である。

グロッタ内部は石灰石トゥファでできた3室の岩屋からなる。手前の第1室は人間と動物の



図8 「ブオンタレンティのグロッタ」

像が表面をおおっているが、これはオウィディウスの『変身物語』のデウカリオンとピュラの話で、石から生まれる新人類の創造を表しているとされる。動物像はブオンタレンティの素描に基づきピエロ・マーティが造形化した。天井のフレスコ画はベルナルディーノ・ポッチェッティ（1542-1612年）が描いたサテュロスと野生動物のヒョウ、サル、ヤギ、フクロウなどである。四隅にある「石から生まれる人間」はミケランジェロ作4体の《囚われ人》（図9）で、これらは本来《教皇ユリウス2世墓碑》の一部だったが、1564年にミケランジェロの甥レオナルド・ブオナッローティがコジモ1世に贈り、1585年にグロッタ第1室に設置された。ブオンタレンティが「物質に囚われた人間」を逆に「石から生まれる人間」に見立てたのだ。1908年にアカデミア美術館に移されるまでオリジナル作品が置かれていたが、現在は1908年制作の複製が置かれている。だが真に驚くべきは、本来は壁をシダ類の植物群がおおいつくし、水が滴り落ちる仕掛けになっていたことである。さらには天井の丸い天窓に、ブオンタレンティが魚の入った巨大な球形の水槽を設置し、魚がゆっくり泳ぐ「水の球体」を通して陽光がゆらゆらと降り注いでいたことである。デウカリオンとピュラは旧約聖書のノアの洪水と同様、墮落した人類が一度洪水で死滅した後の再生の物語なので、天井に水槽があることは洞窟全体を水面



図9 ミケランジェロ作《囚われ人》



図10 ヴィンチェンツォ・デ・ロッシ作《パリとヘレネ》

下に暗転させる効果があったはずである。

その奥に見えるのが第2室のヴィンチェンツォ・デ・ロッシ（1525-87年）の官能的な《パリとヘレネ》（1560年）（図10）である。本来シニョリア広場の噴水コンクール出品作（優勝者はアンマナーティ）だったが、1560年にコジモ1世に贈られ、1587年に第1室に設置。1912年にバルジェッロ国立博物館に移されたが、ミケランジェロの名作と違って、1927年から第2室にまた戻された。この彫刻までは外部から見る事ができる。

神話上パリとヘレネを結びつけるのは愛神





図11 ジャンボローニャ作  
《ヴィーナス》

ヴィーナスである。そこで奥の第3室にはジャンボローニャ（1529-1608年）の艶麗な《ヴィーナス》（1570年頃制作）が設置されている。本来フランチェスコ1世の部屋にあったが、1592年にここに移された。白大理石の「水から生まれるヴィーナス」または「水浴びをするヴィーナス」の下方では水盤の縁に手をかけた好色な4体のサテュロスが覗き見をしている。かつて4体のサテュロスの口からは水が噴出し、女神の白い裸身を四方から濡らしていたという。官能的悦楽を象徴する作品である。第1室から第3室に奥まるにつれ、空間は徐々に狭く薄暗く、妖しいまでになまめかしくなっていく。

1585年3月にフランチェスコ1世に謁見した天正遣欧使節の4人の少年は、プラトリノー庭園の詳細な説明とは違って、ピッティ宮殿の庭園については、「もしこの手入れの行き届いた庭園の面白さをいちいち述べるとすれば、長い話をせねばならないであろう」と述べるにとどめて子細を語らないので、実際にどれほどのものを目にしたのかは不明である。

フランチェスコ1世を継いだ弟フェルディナンド1世の大きな貢献は、ボーポリ庭園のた

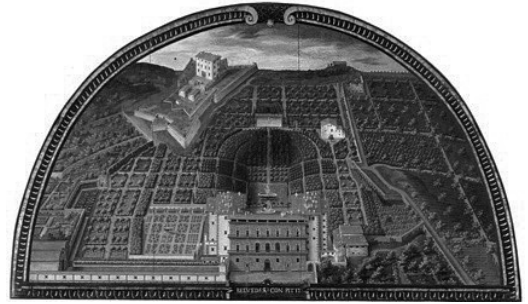


図12 ウテンス画《ピッティとベルヴェデーレ》  
出典) Luigi Zangheri (a cura di), *Le Ville medicee in Toscana*, Firenze, 2015, p. 84.

めに大きな水道管を建設してムニョーネ川から水を引き、噴水に大量の水を供給したことである。1588年、アンマナーティの噴水（図6）をプラトリノーの別荘からピッティ宮殿の中庭の仕切り壁（庭園側を向いた場所）に移動させたのが彼である。フェルディナンド1世は、フランチェスコ1世とピアンカ・カペッコの愛の巣窟だったプラトリノーの別荘を忌み嫌い、兄の業績を否定しようとしたようである。

フェルディナンド1世時代のピッティ宮殿と庭園については、1599年のジュスト・ウテンスのルネッタ《ピッティとベルヴェデーレ》（図12）が正確に記録している（ルネッタ14点は本来ヴィッラ・デイ・アルティミーノにあったが、歴史博物館を経て、2014年以降ヴィッラ・ラ・ペトラリアに展示されている）。アンマナーティの第一次拡張でできた中庭の先に緑でおおわれた野外劇場が突き出し、その平土間の草地の上には1576年に設置されたジャンボローニャの大理石製《オチェアーノの噴水》（1576年）（n. 69）（図13）があって、当時から驚異の噴水と絶賛されていた（現在は「小島（イゾロット）」の中央にある）。エルバ島から運ばれた巨大な花崗岩でできた水盤の中央に白大理石製《オチェアーノ》が立っている。オチェアーノ（大洋）は海神ネプトゥヌスと同義であり、ボーポリ庭園における最重要作品である。1576年完成当時は野外劇場の中央に設置されていたが、



図13 ジャンボローニャ作  
《オチェアーノの噴水》

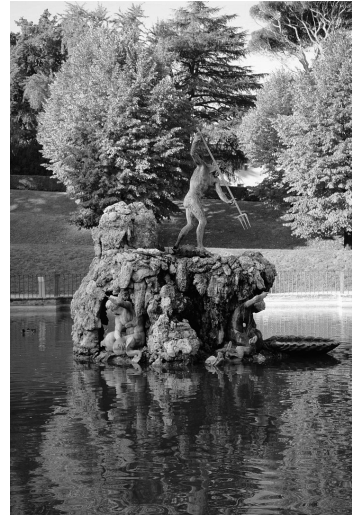


図14 ストルド・ロレンツィ作  
《ネプトゥヌス》

1618年に宮殿東側の「マダマの庭園」に移され、1637年に現在見られる「小島の池」の中央に移された。オリジナル作品は1811年にバルジェッロ国立博物館に移り、「小島の池」にはラッファエッロ・ロマネッリの複製が置かれている。足元には鎖でつながれて優美にすわる「ナイル」「ガンジス」「ユーフラテス」の3河神座像。基部の浮彫は水にまつわる物語を表す「エウロペの掠奪」「ヴィーナスの凱旋」「ディアナの水浴」である。

ウテンスのルネッタでは宮殿から緑地の丘の頂にかけて伸びる南北の軸線がはっきり見てとれる。上方には矩形の「池」がある。この池は1709年の平面図ではまだ矩形だが、1789年の平面図では現在と同じ楕円形に近い唇形である。ルネッタでは宮殿左手の「養魚池 (vivaio)」に設置されていたストルド・ロレンツィ (1543-83年) 作大理石製《ネプトゥヌス》(1565-68年) (n. 33) (図14) は、現在、この上方の「池」に設置されている。そのために「ネプトゥヌスの池」または「フォルコーネの池」と呼ばれている。フォルコーネとは巨大フォークの意味で、ネプトゥヌスが手にする三叉矛のことである。



図15 野外劇場とベルヴェデーレ要塞

ウテンスのルネッタでは、左下の「ブオンタレンティのグロッタ」通称「グロッタ・グランデ」に接した「ヴァザーリの通廊」(1565年)の終着点が見える。「グロッタ・グランデ」の上方の左中には、最初にできた「グロッチェーナ・デイ・マダマ」が見える。ルネッタの左上は、1590-95年にブオンタレンティとジョヴァンニ・デ・メディチが建造した星形の「サン・ジョルジョ要塞」通称「ベルヴェデーレ要塞」(図15)である。要塞のなかの三階建てのベルヴェデーレ館はおそらくアンマナーティが設計した。

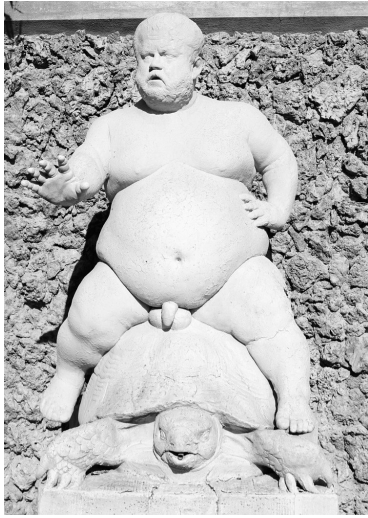


図16 ヴァレリオ・チョーリ作  
《侏儒モルガンテ》



図17 ヴァレリオ・チョーリとシモーネ・  
チョーリ作《ブドウ収穫の泉》

コジモ1世はカステッロの別荘やシニョリア広場を彫刻で飾る以前からボーボリ庭園を彫刻で飾り始めた。コジモ1世時代の彫刻には宮廷彫刻家金工メダル作者ドメニコ・ポッジーニ(1520-90年)がつくった白大理石製《アポロ》(1559年)(n. 151)がある。大公冠をかぶるカプリコロノはアウグストゥス帝や皇帝カール5世と同じコジモ1世の星座(山羊座)であり、太陽神アポロ=コジモ1世=アウグストゥス帝=皇帝カール5世の同一化を表象している。

16世紀最高の彫刻家ジャンボローニャ、バンディネッリ、アンマナーティ、ストルド・ロレンツィら優美な作風の作品とともに、16世紀後半の特徴は偏奇で奇抜な驚異が好まれたことである。彫刻家ヴァレリオ・チョーリ(1529-99年)がつくった2人の侏儒の宮廷道化師の大理石彫刻が典型例である。尊大なポーズがユーモラスな《侏儒モルガンテ》(1560年)(n. 1)(図16)は《バッコ》または《バッキーノ》ともいう。現在、庭園入口のものは複製で、オリジナル作品は後述のカフェハウス内にある。《侏儒バルビーノ》(?年)(n. 14)は《マルグッテ》ともいう。彼もまたコジモ1世の宮廷道化師であり、作品は当

初からボーボリ庭園にあった。

ヴァレリオ・チョーリはまたいくつかの庶民像もつくっている。《ラヴァカーポ(洗髪)》(1595-97年)(n. 42)や甥シモーネ・チョーリ(1653年没)との共作で《鋤で耕す若い農夫》(1608年完成)(n. 129)や《ブドウ収穫の泉》(1608年完成)(n. 130)(図17)などである。

### Ⅲ メディチ家後期4代トスカーナ大公の時代

17世紀のコジモ2世(在位:1609-21年)とフェルディナンド2世(在位:1621-70年)の時代に宮殿と庭園に大きな変化が起こる。この時期の最重要建築家はブオンタレンティの弟子ジュリオ・パリージ(1571-1635年)とその息子アルフォンソ・パリージ(1606-56年)である。ジュリオ・パリージの才能は祝典の飾り付けやマリア・マッダレーナ・ダウストリアのためのポッジョ・インペリアーレの別荘の改修(ファサード追加)ですでに実証済みだった。息子のアルフォンソはさらに劇場的要素をもっていた。この親子が、ピッティ宮殿の第二次拡張工事でファサードを従来の七径間から現在見られる二三径間に広





図18 スジーニ作《カルチオーフォの噴水》

げ、庭園を西方に大きく拡張した。

中庭と庭園の連結部分にあった前記アンマナーティの噴水は1635年に解体撤去され、同所にはフランチェスコ・スジーニ（1646年没）が着手した有名な《カルチオーフォの噴水》(n. 15) (図18)が1642年に設置された。トリトン、プット、渦巻き装飾、貝殻などの軽快なモチーフで飾られた噴水は、最良のバロック的ファンタジアに到達し、大規模化するフランス式イタリア庭園に影響を与えた。

17世紀における庭園の重要な変化は、緑の凹地が文字どおりの野外劇場(図19)に変化したことである。野外劇場の緑の凹地には1618年までジャンボローニャの《オチェアーノの噴水》が置かれていたが、同年、サンタ・フェリチタ寄りの「マダマの庭園」に移された。つまり1618年までは「野外劇場」の機能はなかったのだ。ウフィツィ宮殿内の劇場は使用されていたものの、馬上槍試合や騎馬パレードなどの大規模スペクタクルの新しい形態により適合した常設野外劇場が時代の要請で必要となった。そこでジュリオ・パリージが設計し、息子アルフォンソ・パリージが協力して、1630年に着工、1634年に完成した。大勢の労働者と石工が動員され、壁、階段座席、壁龕、花綱装飾などがつくられた。1世紀後の1740年に劇場装飾に変化



図19 野外劇場

があり、12点の小さな大理石彫像がカジノ・デイ・サン・マルコから壁龕に移された。すなわち《ヘラクレス》《エロス》《ヴィーナス》《アポロ》《ヘラクレス》《ディアナ》《マルシュアス》《エロス》《アポロ》《エロス》《戦車の御者》《競技者》(n. 18-n. 29)の12点である。9点がローマン・コピー、3点が16世紀から18世紀にかけての作品である。

記録に残る最初のスペクタクル(おそらくは柿落しではない)は1637年、フェルディナンド2世とヴィットリア・デッラ・ローヴェレの結婚祝典の掉尾を飾る「騎馬パレード」だった。スペクタクルはトルクアート・タッソーの『解放されたイエルサレム』より「魔女アルミーダの物語」であり、アルミーダの凱旋車を複数のゾウが牽引し、高度な技術を使った魔法の千変万化が眼前でくりひろげられた。新郎新婦を中心に宮廷人は宮殿側に仮設された栈敷席に座って観衆に身をさらしたが、「騎馬パレード」には大勢の演者に混じってフェルディナンド2世の弟ジャンカルロ・デ・メディチが参加していた。ジャンカルロはのちに枢機卿になる人物だが、スカラ通りに庭園をつくって愛人と逢引きを重ね、ペルゴラ劇場とニコリーニ劇場を創設した陽気な遊び人だった。

野外劇場における最大のスペクタクルは、1661年、フェルディナンド2世の長男コジモ(3世)とマルグリット・ルイーゼ・ドルレ안의

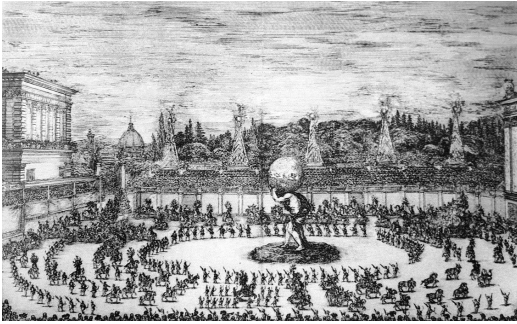


図20 ステファノ・デッラ・ベッラ「祝祭の世界」  
出典) Caneva, *op. cit.*, p. 13.

20日間におよぶ結婚祝典の一環で催された「祝祭の世界」である。「騎馬パレード」より「アトラス」の場面を描いたステファノ・デッラ・ベッラの版画(ウフィツィ美術館素描版画室)(図20)が残っている。

階段座席を拡張して2万人の観衆を収容したスペクタクルは、7月1日の夕刻に開催された。舞台装置は建築家フェルディナンド・タッカ。夕闇が「昼のように明るく」照らされ、ヘラクレスに扮したコジモが騎士の隊列を先導した。スペクタクルの山場は、アトラスの巨大な像が肩に世界を背負って登場し、玄妙な仕掛けでアトラス山に変貌したかと思えば、山頂から世界の4地域(ヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカ)を表す4人の娘が出現して歌を歌う場面である。また太陽と月の2台の馬車が合体して1台の巨大な馬車になり、周囲では騎士の踊りが目も綾にくりひろげられた。これがメディチ宮廷最大かつ最後のスペクタクルとなった。

南北方向の軸線の坂の頂上には大理石彫刻《アッボンダンツァ(豊穡の女神)》(1608年, 1636-37年)(n. 34)(図21)が1636年に設置された。この像はジャンボローニャがフランチェスコ1世妃ジョヴァンナ・ダウストリアの肖像として着手し、ジャンボローニャ没後、弟子のピエトロ・タッカ(1577-1640年)が完成させたものである。当初、サン・マルコ広場の円柱上

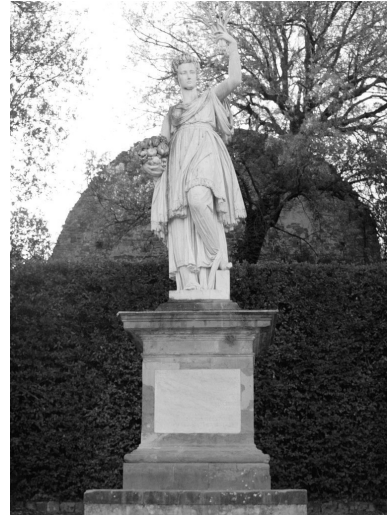


図21 ジャンボローニャ、ピエトロ・タッカ作《アッボンダンツァ(豊穡の女神)》



図22 「イトスギの並木道」

に設置されたが、フェルディナンド2世が1636年にボーポリ庭園に移し、フェルディナンド1世治下でトスカーナが享受した繁栄を賛美するために、新たに「アッボンダンツァ」のシンボル(左手にもつ穂束はブロンズ製)が追加された。

だが庭園のもっと重要な変更は、東西方向のローマ門にいたる軸線の形成である。ジュリオ・パリージの設計で1631年、メインストリートの「イトスギの並木道」(図22)いわゆる「ヴィオットローネ」が貫通し、その周囲にみごとな庭が造成された。なだらかに傾斜する並木道の



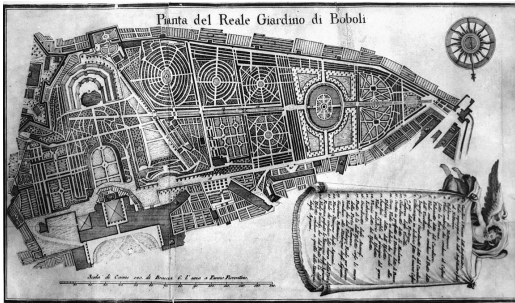


図23 ソルディーニ「ボーボリ庭園平面図」

出典) Caneva, *op. cit.*, p. 21.



図24 「小島の池」

両脇は交差する脇道で区分され、ほとんどシンメトリカルに配置された複数の庭が、ツゲ、イトスギ、ゲッケイジュなどの生垣に囲まれた迷路を構成し、その迷路はしばしば緑のアーチにおおわれていた。1631年にさかのぼるこの複数の幾何学的迷路(1709年のゴーリの平面図や1789年のソルディーニの平面図(図23)に明瞭に描かれている)は、イタリア式庭園の最も典型的な先例だったが、今ではより単純な曲線の散歩コースになったため、当初隠されていたはずの寓意的な意味は不明瞭になってしまった。庭園は旧約聖書のエデンの園やギリシア神話のヘスペリデスの庭を地上に再現する楽園と考えられていたので、いろいろな意味の解釈が可能なのである。

「イトスギの並木道」の両脇には彫刻がシンメトリーに多数並び、西の終点付近には、アルフォンソ・パリージが実現した楕円形の「小島の池」(図24)がある。「小島の池」の中央には

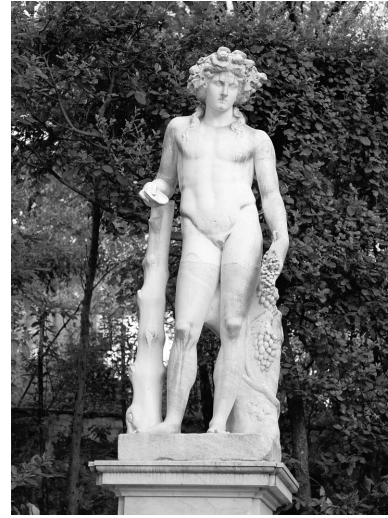


図25 ローマン・コピー《バッカス》

前述のジャンボローニャ作《オチェアーノの噴水》(図13)が屹立する。池周辺の彫刻もおもしろい。小島へ通じる道は鉄柵で閉鎖されているが、入口には17世紀ジャンボローニャ派の4体の《カプリコロノ》(n. 72)を戴く円柱が立ち、円柱の両脇にはアルフォンソ・パリージの設計に基づく貝殻形水盤に水を注ぐ海獣を表す17世紀ジャンボローニャ派の4体の《ハルピュイアの泉》(n. 73)が配置される。この泉のオリジナル作品はピエトラ・セレーナ製だったが、1776年に大理石製の複製(彫刻家スピナッツィ、ベッリ、カベッツォーリ、ハルウッド作)に交換された。「小島の池」のなかには17世紀ジャンボローニャ派の《ペルセウス》と《アンドロメダ》(n. 70, n. 71)が1637年に設置された。助けを求めるアンドロメダと馬を駆るペルセウスは池の反対側にいるので決して会うことはない。

17世紀のボーボリ庭園は彫刻があまた並ぶ野外美術館の様相を呈するようになった。特に「イトスギの並木道」の両脇から「小島の池」の円周や「半円形の庭」にかけて16世紀と17世紀にメディチ家が蒐集したギリシアやローマの彫刻コレクションが並んでいるが、ローマン・コ





図26 ドメニコ・ピエラッティ作  
《農婦と犬》



図28 カペッツォーリ作《チヴェッタの遊び》



図29 ロモロ・フェッルッチ・デル・タッダ作  
《3人のグロテスクな男》



図27 オラツィオ・モキ作  
《サッコマッツォーネの遊び》

ピーの《バックス》(n. 57) (図25) など端整な古典的作風の彫刻に混じって、ドメニコ・ピエラッティ作《農婦と犬》(1651年) (n. 79) (図26) のような田舎風の庶民像もある。

躍動的な遊びの動きや滑稽なしぐさは、17-18世紀の宮廷における風刺的諧謔的趣味をよく示している。オラツィオ・モキ(1550-1627年)作《サッコマッツォーネの遊び》(1620年頃) (n. 66) (図27)。ジョヴァンニ・パッティスタ・

カペッツォーリ作の《ペントラッチャの遊び》(1780年) (n. 67) や《チヴェッタの遊び》(1780年) (n. 123) (図28)。銅版画家ジャック・カロの銅版画を立体化したロモロ・フェッルッチ・デル・タッダ(1544-1621年)作《3人のグロテスクな男》(1617-21年) (n. 114) (図29) などである。ロモロ・フェッルッチ・デル・タッダはまた、コジモ2世の趣味を反映して、グロテスクで愛くるしい髭面をした16体の怪物の口から次々に水が流れ落ちる階段状の「モスタッチェニ(髭面)の泉」(1619-21年)もつくっている。

メディチ時代の建造で触れるべき最後の場所は、丘のいちばん高所に位置する「騎士の庭」で



図30 「騎士の館」(陶磁器博物館)

ある。騎士の名称は、1529年にミケランジェロが建造し、1544年にコジモ1世がシエナ軍の襲撃に備えて修築させた稜堡に由来する。「騎士の庭」にピエトロ・タッカ作《猿の噴水》(n. 37)がある。水盤上のプットは大理石、下の猿はブロンズ製である。その庭に枢機卿レオポルド・デ・メディチ(1675年没)が学者や芸術家の集いを催すために屋敷を建造し、コジモ3世(在位：1670-1723年)が潇洒な「騎士の館」(現、陶磁器博物館)(図30)に改築した。メディチ家最後の大公ジャン・ガストーネ(在位：1723-37年)は、この館で幼少期に生き別れた母の母語であるフランス語を勉強したが、後年フランスに母を訪ねたときには面会を拒否されたという。

1677年には現在のリモナイアの場合に珍獣希鳥の檻がつくられた。そこには、驚異や稀少性を求める16世紀の趣味の名残である「ポルトガルの太ったハト」を含む各種の鳥獣が生きのままや剥製の形で飼育・保存されていた。博物学を愛したコジモ3世らしい趣味である。

#### Ⅳ メディチ家以後——ロートリンゲン家・ボナパルト家・サヴォイア家

1739年、ロートリンゲン家の新大公フランツ・シュテファン(在位：1737-65年)と MARIA・テレジアのフィレンツェ入市に際し、「ヘラクレス」「ヒュドラ」「名声」の寓意の付いた大規模



図31 ザノビ・デル・ロッソ「カフェハウス」

な機械仕掛けが設営された野外劇場において何発もの仕掛け花火が早春の夜空に打ち上げられた。

シェーンブルン宮殿で腕をふるった建築家ジャン・ニコラス・ジャド(1710-61年)が、ロートリンゲン家に随行してフィレンツェにやっ来たが、同時代のフィレンツェ人によれば、彼こそ「醜悪さ」の元凶だった。というのも1740年、それまで数々のスペクタクルの舞台だった野外劇場の平土間に「悪息芬々たる花々」を植えて「醜悪」に変形させたからである。

啓蒙専制君主ピエトロ・レオポルド(在位：1765-90年)の時代に、庭園にとっての「美麗さと壮大さ」の新時代が到来する。農業、水路、博物館システムへの新しい関心、芸術品への配慮、都市問題の解決と結びついた社会感覚が、ボーボリ庭園のマイクロコスモスに正確に反映され、1766年から庭園の一般公開(1週間のうちの数日に限定されていた)が始まり、園内でのボール遊びやコマ遊びまで許された。ちなみにウフィツィ美術館の一般公開は1769年である。

ピエトロ・レオポルド時代の建築家はイニャツィオ・ベッレグリーニ(1715-90年)、ザノビ・デル・ロッソ(1724-98年)、ガスベロ・パオレッティ(1727-1813年)らであり、大公の要望を完璧に理解した18世紀特有の近代的な建築をフィレンツェに追加した。

ザノビ・デル・ロッソは1775年、ボーボリ庭園に階段状の庭と果樹園が付いたカフェハウス





図32 ザノビ・デル・ロッソ「リモナイア」



図34 「半円形の庭」別称「円柱の草地」



図33 メリディアーナ小宮殿



図35 《エペイロス王ピュロス》

(図31)を建設した。下部の小さなグロッタなどはフィレンツェの伝統に従っているが、銅の丸屋根や薄緑の色彩感覚や庭園に合わせた建築の軽快さなどは完全に当世風のものである。最上階は手すりの付いた展望台になっている。宮廷人はベルヴェデーレ要塞への散歩の途中にここで休憩し、都市の眺望を楽しみながら朝食をとったという。のちにナポレオンもここから市街を見おろすことになる(1796年)。

同じザノビ・デル・ロッソが1778年、堀に囲まれた古い珍獣希鳥の檻を新たに柑橘類のための近代的な「リモナイア」(レモン温室)(図32)に改築した。「小島」とその周辺の小さい庭を飾るデリケートな植物が冬を越すための建物であり、エレガントな外観と愛らしい色彩が特徴的である。こうして大公の食卓にはレモンやパイ

ナップルが季節を問わず提供された。

メリディアーナ小宮殿(現、衣装博物館)(図33)はガスベロ・パオレッティが1776年に着工し、ポッチェッティが完成した。メリディアーナは「日時計」の意味で、当時、庭園のその場所に保存されていたヴィヴィアーニ作「日時計」に由来する名称である。小宮殿前の出口にはジョヴァンニ・ノーベリとジョヴァンニ・デッラ・サピエンツァ作《2頭のライオン》(1777年?) (n. 156) が並んでいる。

「小島」とローマーナ門のあいだは生垣で囲まれた「半円形の庭」(図34)が、ピエトロ・レオ





図36 《ダキアの囚人》

ポルド時代に整備された。ここにはピエトロ・レオポルドが建築監督オノフリオ・ボーリに命じて胸像などの古代彫刻または古代風彫刻を点々と配置させた。胸像で重要なのは、前4世紀のギリシア彫刻のローマン・コピーの大理石作品《エペイロス王ピュロス》(n. 98) (図35)で、これはジョヴァンニ・リッチ枢機卿がフランチェスコ・デ・メディチに贈り、1563年にローマからピッティ宮殿に到着し、同年、ヴァレリオ・チョーリが修復した作品だった。またピエトロ・レオポルドが獲得して設置を命じた、東方の赤色花崗岩製の古代ローマの2本の円柱(n. 104)が立っている。1796年に整備が完了した「半円形の庭」はそのために「円柱の草地」とも呼ばれる。

ピエトロ・レオポルドが推進した18世紀らしい刷新には、より適切で特殊なものがある。例えば多数の彫刻をローマやプラトリーノから運んできたことである。重要作品は2世紀ローマの2体の《ダキアの囚人》(n. 7ab) (図36)であり、これは赤色斑岩と白大理石製で、ローマのヴィッラ・メディチから運ばれて1785年にボーポリ庭園に設置された。また4点のブロンズの《亀》にのる赤色花崗岩の《エジプトのオベリスク》(n. 16) (図37)が野外劇場の中央に設置された。《エジプトのオベリスク》は前30年にルクソール神殿からローマに運ばれ、16世紀にフェルディナンド・デ・メディチ枢機卿の要



図37 《エジプトのオベリスク》



図38 ヴィンチェンツォ・ダンティ作《ペルセウスと怪物》

望でローマのヴィッラ・メディチに置かれていたが、それをピエトロ・レオポルドが1790年、野外劇場の中央に設置させたのだ。そのヒエログリフは前1500年の第19王朝初代ファラオのラムセス6世を賛美している。オベリスクの下に、ローマのカラカラ浴場から運ばれた巨大な花崗岩製の浴槽が追加されたのは、1841年に



図39 バッチョ・バンディネリ  
(?) 作《ユピテル》

なってからである。

修復も盛んで、18世紀当時「ミケランジェロのグロッタ」と呼ばれていた「ブオンタレンティのグロッタ」の修復(1767年)、「カルチオーフォの噴水」の修復(1774年)などがある。1790年にはジュゼッペ・デル・ロツォが「騎士の庭」に登る美しい石段を建設し、登りきったところにプラトリートから運ばれた彫刻《ミューズ(クレイオ)》と《ミューズ(カリオペ)》(n. 40, n. 41)を飾った。なおプラトリートから運ばれた他の重要作品には、ヴィンチェンツォ・ダンティ作《バルセウスと怪物》(1577年)(n. 120)(図38)やバッチョ・バンディネリ(?)作《ユピテル》(1552-56年)(n. 11)(図39)などがある。

ピエトロ・レオポルド時代はブドウ園、花壇、金網の鳥舎、マスの泳ぐ池、鳥の猟場、迷宮の庭など庭園の整備が進む一方、丘の地滑りで徐々に衰退していたピエトラ・フォルテの古い採石場が地中に埋められたことも記憶にとどめておきたい。場所はメリディアーナ小宮殿(現、衣装博物館)の前の丘である(図40)。丘に向かって左手には歴代大公の氷室があり、右手にはアリストデモ・コストリ(1803-71年)作《ベ



図40 メリディアーナ小宮殿前の丘

ガサス》(1865年)(n. 148)が見える。

1801年からのブルボン家支配時代、《侏儒モルガンテ》前の空き地「バックスの広場」が馬を調教する馬場として使用された。1809年からメリディアーナ小宮殿に住んだ大公エリーザ・バチョッキ(ナポレオンの妹)(在位：1809-14年)は、ボーポリ庭園の手入れを怠り、樹木を伸び放題に放置した。そのため陽光が不足し多くの植物が枯れた。庭園の幾何学的なシンメトリーが失われた結果、ボーポリ庭園は鬱蒼たる英国式庭園に変貌していった。

1814年にロートリンゲン家のフェルディナンド3世(在位：1790-99年, 1814-24年)が復位すると、本来のボーポリ庭園の姿を回復する必要を痛感し、当初の歴史的外観を取り戻そうと努力した。カーネーションを栽培するためには温室と微温浴室を発展させたし、祝祭の伝統や一連のスペクタクルも軍事パレードも再開した。その点、英国式庭園のまま放置されたプラトリート庭園とは対照的な運命をたどったといえよう。

ローマナ通りに入るアンナレーナ出口のそばに1817年につくられた「アンナレーナのグロッタ」(図41)がある。内部にはミケランジェロ・ナッケリーノ(1550-1622年)作《アダムとエヴァ》(1616年?) (n. 139)が立っている。作品自体はさしたる傑作でもないが、貝殻や石灰石トゥファの壁面からシダやコケが生え、池に



図41 「アンナレーナのグロッタ」

魚影の群れるさまは、昔日のグロッタの雰囲気を今に伝える唯一の場所として感興をそそられる。

レオポルド2世(在位:1824-59年)も父の復旧事業を熱心に継続し、とりわけスミレの世話をして植物栽培を促進した。この時点で花の植木鉢は5000以上、柑橘類の植木鉢は500以上を数えた。1841年には47ページもある詳細な『ボーポリ庭園植物目録』が出版された。植物の名前がアルファベット順に並び、例えば、アカシア、アロエ、アマランサス、アマリリス、オダマキ、ベゴニア、ツバキ、キク、ミカン、レモン、エリカ、ハイビスカス、バラ(約50種!), パーベナ、ヒャクニチソウなどが含まれる。庭園はすべての祝日と木曜日、また季節によっては毎日決まった時間に開園して一般に公開された。

1865年から1870年の統一イタリア王国の首都だった時代にサヴォイア家の国王ヴィットリオ・エマヌエーレ2世がピッティ宮殿に住んだが、庭園に目立った変化はなかった。

## V 現代のスペクタクル・彫刻・動植物

ボーポリ庭園はスペクタクルの舞台として今日なお重要な役割を担っている。まず1906年、リヴォルノ出身の作曲家ピエトロ・マスカーニ(1863-1945年)が野外劇場でヴェルディやワーグナーのオペラを指揮したのが特筆される。



図42 チェッリーニ作  
《ナルキッソス》



図43 ジャンボローニャ作  
《建築》

フィレンツェ五月音楽祭が始まるのは1933年である。同年、マックス・ラインハルト(1873-1943年)がボーポリ庭園の3か所の斜面を利用して『夏の夜の夢』を上演したのを皮切りに多くのシェイクスピア作品が上演された。とりわけ印象的なのは、1949年のフィレンツェ五月音楽祭で、映画監督ルキノ・ヴィスコン





図44 「騎士の庭」のバラ

ティが演出した『トロイラスとクレシダ』である。その後も、フランコ・ゼッフィレリがヤコポ・ペーリのオペラ『エウリディーチェ』を演出し、モーリス・ベジャールがバレエ『ペトラルカの凱旋』を振り付けるなど名演が続いた。

ボーポリ庭園は野外彫刻美術館の性質をもつが、前記アンマナーティ作《ユノの噴水》のように、ベンヴェヌート・チェッリーニ(1500-71年)作《ナルキッソス》(図42)やジャンボローニャ作《建築》(図43)など、ボーポリ庭園に一時置かれていたもので、現在はバルジェッロ国立博物館に展示してある作品もある。

現在の庭園できわだった植物はトキワガシと柑橘類とツバキとバラである。バラはメディチ時代から一貫して収集されてきた。現在、バラの花壇は「リモナイア」の前庭、「騎士の庭」(図44)、「小島」などに配置され、ペトライア、カステッロ、ポッジョ・ア・カイアーノの別荘とともに、ヨーロッパで最も重要なバラ・コレクションのひとつとなっている。四季を通じて手

入れの行き届いた各種の花々が咲き誇り、馥郁たる香気を漂わす。

野鳥はクロウタドリ、セリン、ズグロムシクイ、ハクセキレイ、ハイイロヒタキ、スズメ、ホシムクドリ、カケス、カササギが樹上でえさえずり、小動物は昼間のアカリス、夜にはハリネズミやムナジロテンなどが樹間を走りまわる。

ボーポリ庭園は市内にありながら郊外型別荘としての性質をもつ彫刻と動植物の宝庫、都市と田舎の接点に文化と自然が融合する理想郷である。今なおエレオノーラが夢見た人工の楽園であり続けている。不断の世話がなければ一瞬で崩れ去る、あやうい均衡の上にかろうじて開く楽園の夢のノスタルジアとして。

#### 参考文献

- Daniele Angelotti, *Il Giardino di Boboli e i suoi labirinti*, Roma, 2017.  
 Caterina Caneva, *Il Giardino di Boboli*, Firenze, 1982.  
 Franco Cesati, *I Medici*, Firenze, 1999.  
 Litta Medri e Giorgio Galletti, *Giardino di Boboli (La Guida Ufficiale)*, Firenze, 1998.  
 Daniela Mignani, *Le Ville Medicee di Giusto Utens*, Firenze, 1988.  
 Mariachiara Pozzana, *I Giardini di Firenze e della Toscana*, Firenze, 2011.  
 Sergio Risaliti (a cura di), *Bernardo Buontalenti e la Grotta Grande di Boboli*, Firenze, 2012.  
 Luigi Zangheri (a cura di), *Le Ville medicee in Toscana*, Firenze, 2015.  
 桑木野幸司「庭園設計家ヴァザーリ」『ルネサンスの演出家 ヴァザーリ』白水社, 2011年。  
 デ・サンデ編, 泉井久之助ほか訳『天正遣欧使節記』雄松堂出版, 2002年。

(2018年7月12日掲載決定)